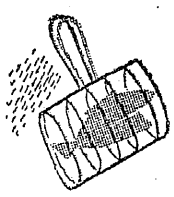
借り食い

―いつも果せない子供との約束―

全自労大牟田分会　野田利德



生活つづり方

「父ちやんもう米が……」

「……」

とたんに重苦しい気持になる。

「今日、仕事からかえつて又十キロ借つて来てね」

「うん、晩飯まではあるかい」

「ええ浩志とミエ子とユウ子は給食ぢやけんアンタと私ら三人分一杯づゝ位食べる程はある」

長男が大正校六年、長女が四年次女が一年に在学中で、その下に五才の三女と二才の次男、合計七人の家族構成である。

生活扶助の金を貰つて米代を一カ月分払うという最初の約束で、米屋さんから十キロづゝ借りて来ると、その十キロが六日間で済んでしまう。

世間の噂ではその米屋は計量が少いという。いわゆるわれわれの言葉でいうと「ハカリ」がこすい訳である。

現金があればよその米屋から毎日一升づゝでも買えるのだが、失対人夫の二七〇円では、その日麦を一キロ五十円、副食代が百円は要るから、子供が菓子類を買つて来ると、その十キロが六日間で済んでしまう。

なお一週間の中、日曜のほかにもう一日の休みがあるから、休みの日の朝の副食は前の晩に塩の多くて腹一杯になるような安価な里芋の親などを買つて、翌朝に持越す次第である。

休みの昼の副食は何も買えず塩をかけて一杯の冷や飯に我慢せざるを得ない。何とかしなくてはいけない、このままではどうなるかと夜になつて床の中で真剣に対策を練るが、現在の社会機構が変らない以上、われわれのしあわせは訪れ得ないと思う。

毎日の賃金が二七〇円、月二十方で五千四百円。それに生活保護の七千二百五十円（住宅扶助千円を含む）を合せても一万二千六百五十円が一カ月の全収入である。

家が自分の家でないから、家賃二千円を払つて電気、水道料が三百円、一カ月の米代五十キロ四千二百五十円を払えば、生活扶助料七千二百五十円が七百円の残金というあわれな状態である。

現在の失対の仲間連の家庭内の事情や、夫婦喧嘩の事が耳に入つて来るが、わが家にも夫婦間の危機が度々訪れる。妻が口を開けば必ず自分はボロでもよいが子供に新らしい服を一枚づつでも買つてやりたいのに、それがいつになつたら買えるようになるだろうか、という不平である。

私自身も心中いつもそう思つているのだが、妻がコボスたびに喧嘩となる訳である。

「父ちやん、正月に服買つてね」

「うん……」

買つてやる約束の返事はするものの、餅も搗かねばならないし、計算してみると心の中は暗い。

学校にいつている三人の子供が私に服の要求をすれば、必ず五才の守見子（スミコ）が。

「父ちやんウチも綺麗な服ば買つてね」

「うん」

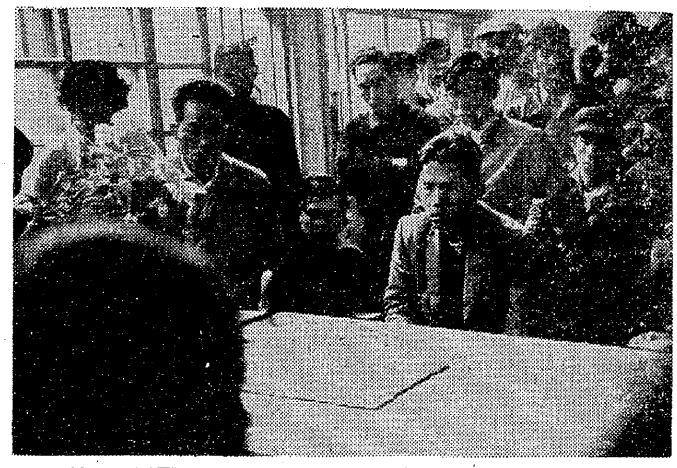
「ボクも」

二才の金徳（ミノリ）も、まめらぬ言葉で自分の当然の要求を提出する。

しかし私は一人思う。衣類はボロを着てもよいが、休みの日でも食物は十分にある生活状態になさねばならない。

子供のこころから現在のような貧困状態だつたならば、こんなになる以前によい方法を講じていたであろうのに。いつになつたら幸せを……という炭鉱夫の歌をいつも思い出して、やつぱり淋しい心に閉ざされる。

× × × ×



首切り撤回を叫んで自労では、170日余の座り込みをつゞけ、職安所長との激しい団交も幾回となく重ねられた。

慰安会に感慨深し

合同労組にこの実り

大牟田地区合同労働組合（略称＝合同労組）主催の〃組合創立三周年記念〃は、去る十七日午後五時から市民館ホールでひらかれた。

この日の参加人員は二・四〇〇名以上をかぞえ、立錐の余地のないにぎわいを呈し、舞台に展開する各種演芸にはよろこびと満足の拍手を贈つていた。

組合の創立以来過去三年間、それは大企業の各労働者からすれば想像もおよばない苦汁に満ちた歩みだつただけに、同労組の組合員誰もの胸のなかには「合同労組がよくぞこれまで……」との感慨がわいたことだろう。

いま、同労組のたどつた三年の足跡をふりかえればほぼ次のとおりである。

合同労組三年の歩み

中小企業労働組合の運動は、松屋従組のストライキ以降八年にわたり多くの中小企業労組が誕生しながらも、その寿命は短く常に一進一退の状態にあつた。実際に当時より残つているものは数組合にすぎない状態である。その大きな原因は、中小企業労組の維持発展には多くの活動家を必要とすること、その支払い能力があまりにも大きいこと、および会社が積極的に切り崩しを行つた場合、組合員の抵抗力が非常に弱いことにあつた。

こうした中小企業労働者の弱さを克服すること、組合の御用化を防ぐこと、企業別組合の発展はすぐに大きな障壁に打ちあたることなどを打解するため、三年前これらの難点を克服し、中小企業労働者の連帯性を強化するため大地評の指導により地域合同労組を結成する準備が整えられたものである。

合同労組は当初、二企業と三団体の従業員七十余名が集り、個人加盟方式で結成された。しかもそれぞれの職場の全従業員でなく、その半数内外くらいの者で結成されたところに、はじめからその特性をもつていた。

さらに二年目に至つて九企業三団体二〇〇余名に発展し活動家の不足、経費不足など多くの難問題を克服しながら三年目には現在二十一企業三団体四三〇名となつたものである。

この間、主なる闘争の特徴としては経済闘争に必ず封建性打破闘争を併用して経済条件の向上と同時に職制を打破して職場闘争の基礎をつくり組合員としての誇を保持し、職場を明朗化したことである。

解雇反対闘争にたいしては一人の解雇も認めないという方針をもつて二十二企業三団体をもつて組織されている合同労組の場合、闘争は三年間連続不断の状態であつたが、そのなかでも顕著なものをあげれば、

一、昭和三十一年春の大牟田青果市場の賃上げおよび解雇撤回闘争は四月二十六日より八月四日の間にわたり、実力行使八日間マイクによる顧客および対外者宣伝十日間、職場闘争三カ月という記録的なものであり、一率二千円の賃上げと二十日分の越年賞を同時に獲得した。

しかも解雇撤回闘争は職場闘争法延闘争を併用し、翌三月にまでおよび、個人の都合で約三十万円の退職金支給を条件に妥結せざるを得なかつたが、その後における会社の労務政策は大いに改善されている。

二、昭和三十二年七月の大牟田運送株式会社の争議は極単な会社側の労務員軽視という職場状態のなかで実力行使に発展したものであり、約二週間にわたる実力行使と職制打破、寄生的重役の退陣、はじめての越盆手当三・〇〇〇円の獲得により一応の終止符をうつたが、ひきつづき五カ月間にわたる職場闘争のなかで一五・〇〇〇円の最賃保障給獲得した。

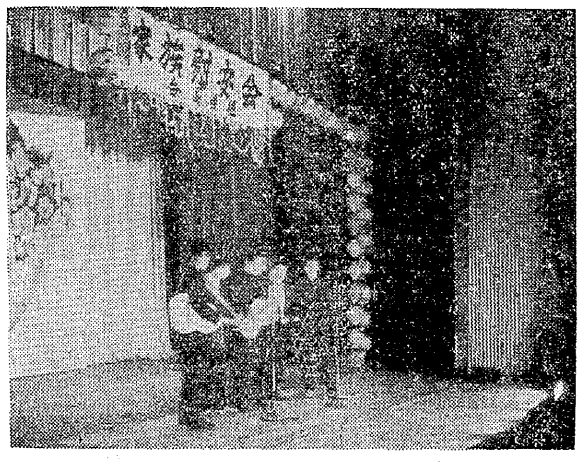
以上は一、二の顕著な闘争の例をあげたが、このような長期且しつような闘争が三十一年一件、三十二年二件、三十三年十件と年々増加の一途をたどつており、会社側の意図も相当なものが多くなつている。中小企業としては前例のない法延闘争、地労委提訴闘争などを交え仮合の組合員が個人の都合により解雇を認めた場合も前例のない多額の退職金を確保してきたまた日常闘争のなかでは常に職場交流による企業別意識の排除に努力し会議、集会などにたいする組合員の集合状態が無休日営業、深夜営業が多いにもかかわらず、漸次向上してきつつある。

しかしながら過去三年間、比較的順況にあり脱落者のなかつた合同労組の組織もさいきん日経連よりの分裂宣伝と対組合闘争指導の強化されるに従い、富士印刷に脱退者を生じ、渡瀬鉄工所に分裂、工場閉鎖、鹿田タクシーに極単な組合員買収による分裂策動があらわれるなど組織防衛面で計画的な日常闘争が必要となつてきた。

この現状のなかで組合の方針もすべての闘争のなかに、組織防衛対策および組織にたいする信頼感をつくりあげること、地域分会と家族にたいする教宣および家族組合の育成に努めるとともに地域を基盤として企業別意識のない組合への転換期にのぞみつつある。

十一月十七日の三周年記念家族慰安会はこうした多面の目的をもつて行われたものである。

以上、三年間の歩みのなかで組織拡大闘争と組織防衛闘争を両輪として全大牟田の中小労働者を一体とする組織確立のための基盤をつくりつつあるのが合同労組の現状である。



合同労組もこんなに成長した。創立三周年を祝う組合員と家族は苦しかつた闘いを振り返り感慨無量であつた。

日本のうたごえについて

センター　荒木　榮

日本のうたごえは合唱コンクールではありません。

労働者を中心とする働らく人たちが、苦しい生活の現実と取り組み、新しい文化を創り出そうと努力してきたことを交流し、その中から新しい発展の方向を目指して進もうという非常に重要な内容をもつています。

マンボ、チャツチャツチャ、ロカビリーなど、多くの青年男女の心をむしばんでいます。

だから政府は道徳教育が必要だといいます。彼らのいう道徳教育とは、国民を軍国主義的な思想にすることです。君が代を小学校の教課の中に復活したのはそのいい例です。

文化が情操を高め、また思想的にも高めていく上で非常に大きな役割を果していくことができるのですが、今はそれが全く逆に使われていると思います。

このような中で開かれる日本のうたごえは、今の反動的文教政策を指弾し、平和で建設的な文化を創造しようとする闘いであると思います。

日本のうたごえ祭典、きまる

一九五八年日本のうたごえ祭典は十二月六、七、八の三日間東京で開かれる。今年はとくに(1)新しい戦争の危険と日本の核武装に反対する(2)アジアの平和と友好、とくに中国との国交回復をかちとる(3)全国民の自由と民主主義を守る闘いを進める。の三つのテーマを柱として祭典の全部が企画され、スローガンも、基本スローガン「うたごえは平和の力」を中心に〃うたは闘いとともに〃〃世界の友と手をつなごう〃〃声高く〃〃この声きけ〃を全国民のものに〃の三つにきまつた。

一、出演の組合せ

十二月七日　1、産業別出演団体　炭鉱、教員、紙パ、全逓労、鉄鋼、造船、専売、全林野、金融、金属、私鉄、全国瓦斯、自治労、印刷出版、農業団体、全海運、全繊維、全医労、学生

2、地方別出演団体　関東、東海、北信越、北海道、中国、四国

3、その他　アコーデオン班、高校生、基地農民

十二月八日

1、産業別出演団体　国鉄、全逓、全鉱、電機労連、国家公務員、電通、都市交通、全日通、電力、化学、新聞、放送、全日貨、保母

2、地方別出演団体　東京、関西、東北、九州

3、その他　主婦、子供、少年班、基地農民

二、日本のうたごえ祭典日程

十二月六日（土）　創作発表会　国鉄労働会館　コンクール形式による合唱発表会　砂防会館

十二月七日（日）　農林のうたごえ　砂防会館　大音楽会　東京都体育館

十二月八日（月）　大音楽会　東京都体育館

十二月九日（火）　日本のうたごえ総会　場所未定

警職法改悪反対のうた

「俺は労働者」の節で

警職法をつぶそう
2赤旗ゆれればホイ
ポリ公がこん棒ふるホイ
それが何だ何だホイ
オラは労働者だオラは労働者だ
ホーイ　ホイ　ホイ
それスクラム組もう
ガツチリと組もう
3アメ公がどなればホイ
岸が「ハイ」と云つたホイ
それが警職法だホイ
それは日本の原爆基地化だ
ホーイ　ホイ　ホイ
それドンと闘おう
警職法をつぶそう
4国中がまとまろうホイ
戦争は真平だホイ
ほんにそうだそうだホイ
おらの日本だおらの力で
ホーイ　ホイ　ホイ
それみんなよつて築こう！
平和な日本!!

映画

大地評推薦

戦争への憎しみ・主題と表現の見事な一体化

戦争と貞操

モスクワの夜明け――。人つ気のない広い通り、橋のたもとで二人の男女が恋によつている。女の名はウエロニーカ、男の名はボリスという。だが突如として起つた独ソ戦争が二人の間を引き裂いてしまつた。

祖国に忠実なボリスはウエロニカの願いもきかず、両親にも無断で志願してしまつたのである。ウエロニカはひたすらボリスからの便りを待つが一向に送られてこない。そのうえ空襲の夜ボリスのいとこマルクに犯され、むりに結婚させられてしまう。

こうして彼女は変してもいない男と結婚する羽目になる。すべて戦争の勃発、恋人の出征、空襲による両親の死という悪夢のような事件のためである。恋人への愛切りが彼女の良心を苦しめた。結婚後の彼女はまるで屍のような存在となり、ただひたすらにボリスからの便りを待つた。そしてマルクとも別れてしまう。

戦争は終つた。兵士たちが帰つてきた。花束をかかえてウエロニーカもやつて来た。そして知つたことは、ボリスが死んだことだつた。

よろこびにわきたつ群衆の中に悲しみと絶望にうちひしがれたウエロニーカがいる。苛酷な運命を甘受し、ようやく祖国とともに生きようとした彼女が空を見上げると、かつてボリスとの逢びきの夜眺めたあの鶴が、列をなして飛んで行く姿が眺められた。

ラストシーンが暗示しているように、これは一つの純愛の記録であり、戦争否定への訴えであり、より多く一人の人間の魂の成長の記録であろうとしているようだ。

一九五八年カンヌ映画祭グラン・プリ受賞作品（二十六日より大牟田名画座で上映、前売券八十円）